

大泉あさひで通信

発行：社会福祉法人 大泉旭出学園 旭出生産福祉園 〒178 - 0063 東京都練馬区東大泉 7 - 21 - 32
Tel 03 - 3925 - 6166 Fax 03 - 3925 - 6169 HP <http://www.asahide.or.jp/>



春の日差しに

社会福祉法人大泉旭出学園の設立と 旭出生産福祉園開設40周年

旭出生産福祉園園長
浅井 浩

■教育と福祉の連携の必要性

本年は、社会福祉法人大泉旭出学園を設立し、旭出生産福祉園を開設してから40周年となります。これまでに関係の皆様方から賜りましたご支援に心より感謝御礼を申し上げます。

大泉旭出学園の事業の源は、昭和25年に発足した園児14名のまったく私的な小さな学園です。それは戦後間もない状況下で、学齢に達した障害をもつ子の教育をなんとかしたいという親の願いから始まりました。その小さな学園が正式な学校となつて、さらにその学校の卒業後をなんとかしたいという親の思いから施設をつくることになりました。こうした経緯で学校法人旭出学園・社会福祉法人富士旭出学園・社会福祉法人大泉旭出学園という三つの法人組織となつてそれぞれが教育と福祉の事業を行う形で現在に至っているわけです。

戦後日本の学校教育法制度は、新しい憲法の理念に基づき、小学校6年と中学校3年を義務教育とし、障害児を対象とする養護学校（現在の特別支援学校）も義務制となりました。

しかし敗戦後の財政難などもあり、実績に乏しかった養護学校の義務制が実際に実施されたのは、新しい学校教育の制度が発足してから32年目の昭和54年4月からです。

養護学校の義務制の実施は遅れたわけですが、養護学校の義務制が実施されるまでの間は、障害児施設が教育の場としての役割を果たし、養護学校の義務制が実施されてからは、その卒業生の多くが進路先として福祉施設を利用するようになりました。それは養護学校が特別支援学校とな

った現在も変わってはいません。この現状はこれからの障害児（者）の教育と福祉を考える上で直視すべき重要な点です。

また地域生活支援、自立支援、就労支援というところの、「地域生活」「自立」「就労」の意味を具体的にどのように理解すればよいのかということがもつと厳密に問われてもよいはずですが、そうしたことがなおざりにされたままであることについても改めて考え直してみることが大切ではないか思います。障害者自立支援法（現・障害者総合支援法）はその点をおろそかにし拙速に施行された法律だったために問題が噴出したといつても過言ではありません。

戦後日本の教育や福祉はそれなりに充実して今日に至っていることは確かです。しかし障害児（者）の教育や福祉をめぐる問題、課題はあまり変わらぬまま特に、学校卒業後に関する問題は依然として変わってはいないように思います。

人の一生においては、学齢期をどのように過ごすことができるかどうか、学校卒業後をどのように暮らすことができるかどうかということは大変重大な問題であり、そこに教育と福祉の連携の意味と必要性があると思います。

■旭出生産福祉園の開設から40年の、今

旭出生産福祉園の開設は昭和49年ですが、その当時の日本は、施設の建設が相次ぐ時代であり、施設中心の施策が進んでおりました。

そうした中で、ノーマライゼーションの理念が広まり、昭和56年の「国際障害者年」を契機に世界的な規模で障害（者）観に大きな影響を与え、同時に施設中心の障害者施策に対する反省を促すものとなりました。日本もその影響を受け、今は、「脱施設」への方向が示されています。しかし社会資源としての「施設」の必要性とその意義は忘れてはならないと思います。

脱施設に向けた考え方自体はよいと思います

が、その考え方の背景となった事情が、福祉先進国といわれる北欧諸国らの場合と日本の場合とはちよつと違うという点にも着目をすべきではないかと思えます。なぜなら欧米らにおける考え方は、知的障害児（者）を施設の中で保護指導するものではあつても、それはいわば社会防衛的な発想による政策的なものであり、保護・指導・治療・訓練等のあらゆる取り組みを施設内だけで完結しようとするものであり、そのために隔離隔絶による人間性軽視に陥ったわけです。その反省が施設化政策の見直しとなつて、それがやがて脱施設化政策へと転ずることになつたといえるからです。

これとは対照的に、日本の場合の施設は、きわめて人道的な見地に立ったもので、社会防衛的な隔離隔絶というよりも、それは社会の圧迫から保護し、生活能力を高めるための教育的な取り組みを施すものでした。その原点は明治時代に石井亮一により設立された「滝乃川学園」です。その取り組みはその後の施設づくりに影響を与え、受け継がれて、現在に至っているといつてよいと思います。福祉先進国から学ぶにしても、それが単なる模倣ではないとすれば、日本流の確たる障害者福祉の理念とそれに基づく施策があつてもよいはずはです。

しかし現状は、未消化のままの理念や目先のつじつま合わせに都合の良い法制度が先行し、実態に即していないという問題が噴出しました。問題が放置されたままになるとは思いませんが、少しでもより良い方向を目指すには、やはり実践現場が発するパワーが必要だと実感しております。微力ながらそのための努力を続けてまいりたいと思えます。

今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

（平成26年度旭出生産福祉園事業計画「新年度事業の展開に向けて」より抜粋・加筆）

旭出生産福祉園40周年 建材科の40年

建材科 北嶋鉄哉

時代の変化

生産部として1961年11月モルタルスペーサーブロック作業が、開始されましたので実際には53年間、半世紀以上の取り組みです。以来作業活動は続き、1974年4月旭出生産福祉園開園となりましたが、建材科の作業棟落成は1976年になります。その間もともと敷地にあったプレハブを利用し、夏は照り返しで蒸し風呂のように熱く、冬は隙間風が入りとても寒かったと伝えられています。製品も作れば作るだけまさに飛ぶように売れ、一日にトラックを何回も出して配達専門員もいました。

今ではその頃を働き抜いた利用者も退園されたり、他科への移動もあり少なくなりました。その頃働いていた方は多忙の中、作業へ向かう気持ちと喜びを覚えた方が多く後々入ってくる後輩に好影響を与えてくれました。それは今でも同様です。

ブロック生産量の推移の大きな変革期はバブル経済（1986年か



ら1991年）の崩壊なのでしょう。お客様の在庫量が減ってきたのも事実です。

第2の波は2005年11月耐震基準偽装問題以降モルタルスペーサーブロックへの不信感の高まりから取引停止の地域が出るほどでした。

第3の波は2008年頃関西からの同業者の関東進出です。見る見るうちに顧客の4割ほどを失いました。一般企業の強さを感じます。

そして2011年3月11日の震災により、よりいっそう耐震基準が高まり、ハウスメーカーも建築資材を抱え込んで業者に提供することで経費と安全性を手中にしました。そのため旭出のブロックの出番は大きく減りました。

それでもひいきにしてください。お客さまのおかげで作業活動は続けられています。売り上げ自体は私が入ってから最高の時の三分の一強にまで落ち込んでいます。時代の変化はこのような状況です。

利用者の変化

前述したように高度経済成長長期に努力されてきた方々のほとんどが建材科から離れました。身体的状況の変化がほとんどです。バブル経済の時に活躍されていた方々は今も元気に活動に取り組んでいます。しかし年齢の変化は一年毎大きく、活動量に変化が生じています。若い利用者の方々も多くはやる気を見せてくれ、頼もしいのですが、時間的な感覚を持ってくれる方が少ないのが残念です。欲を言えば梱包作業を覚えられ方が育てられればと常に思っています。このような状態ですが、ちょうど売り上げが落ちる斜線と並行して製造能力も落ちているので利用者が無理なく作業を進められる状況にあります。利用者は自分の力を出し切って満足し、達成感を持っています。



一日でも長く、この作業を続けたいところですが業界の流れ、利用者の変化など大きな課題を抱えています。どのようなふうにも利用者の自信や喜びを大切にしたいと考えています。

三越工芸展

まんまる 古屋 一秋

旭出生産福祉園に勤めて十数年がたちましたが、今までは建材で利用者の皆さんの支援を行なっていました。建材は建築資材のモルタルスパーサーブロックを作って、業者に販売する受注作業でした。

平成25年度からまんまるに異動し、工芸作業である木工活動を担当させてもらうことになりました。同じ施設内とはいえ、力仕事を中心とした建材での活動と根気強く丁寧な手仕事が必要とされる木工での活動とは、異なる点が多くて日々勉強の毎日です。好評をいただいているゾウなどの動物やキーホルダーを電動糸ノコギリで切ったり、それらを紙やすりでみがいたりしています。おどろか



されたのは、利用者さんのなかにも電動糸ノコギリを使用して動物を切ったり、電動ドリルで穴をあけたり出来る方たちがあることでした。私が動

物を切っていると、心配そうに様子を見ている方や、仕上がりが合格点ではなかったのか修正している方がいました。また、紙やすりでみがくことについても、私より利用者の皆さんの方が根気強く丁寧に進めていました。このように皆さんが日々努力して作っている製品が、旭出学園工芸展などで販売されるのだということ、今更ながらですが実感させられました。

平成26年2月26日から3月3日まで、日本橋三越本店で第25回旭出学園工芸展が開催されました。建材を担当していた時は、沢山のお客様に向けて販売できる機会の工芸展で、製品によっては早目に売り切れてしまうのもつたいたいと感じていました。実際に木工を担当してみても、工芸品を仕上げるには、思っていた以上に手間と時間が必要であることが分かりました。沢山の方々に製品をお届けしたいのですが、なかなか数をそろ



えることが出来なかったのが心残りです。工芸展は、ただ製品を用意すれば良いというわけではなく、工芸展開催のための渉外や案内状作成などの事前準備にも労力が必要なことが分かりました。製品の写真付きリストを作成し、誰が販売に入っても対応できるようにするなど、工芸部門の先輩職員達の工夫に感心させられる場面が多かったです。

今回初めて販売の当番に入ったのですが、事前に三越での販売講習に参加させてもらい、接客の仕方を学ぶことができたのが貴重な体験でした。私が販売の当番に入った日に、利用者の皆さんと一緒に作成した木工製品だけではなく、その他の製品についても自信を持ってお勧めすることが出来ました。また、実際に製品が売れると、とても嬉しい気持ちになりました。

最後になりましたが、工芸展に足を運んでくださった皆様、受付の当番に入っていたいただいた保護者の皆様、関係施設の皆様、本当にありがとうございました。



実習生のちから

相談援助実習、社会福祉施設実習等、及び介護体験等実習、研修、体験などで年間100名を超える方々が利用者と係わります。

実習生の中には演奏会などをして利用者を楽しませてくださるかたがいます。そうした方々との時間を通し、利用者へ届けてくれる楽しさや喜びは、とても新鮮です。



パネルシアター



かえるのうた

介護体験等実習生の感想

充実した5日間を過ごすことが出来ました。利用者の方々とも言葉によるコミュニケーションがなくても、かかわりを通して言葉以外のコミュニケーションがいかに大切なのかを学ぶことが出来ました。この介護体験の前は知的障がいを持つというイメージがあった。今回旭出の利用者の方々とかかわりを通して、「障がい」というわがしたちとは少し違う特徴はあるけれど、みんな私達と変わらないひとりの人間であり、自分の中で障害を持つ人としてどこか違う世界の人のようにくっついていたことに気が付きました。

午後の散歩で利用者の方々との隣の公園に行ったとき、中学生ぐらいの男女のグループが「身障」「気持ち悪い」という心無い声を聞いた。ショックですごく悲しかったが、自分の思ったことを何も考えずに口にしてしまうのが中学生の残酷さでもある。こういう子供たちに『障がい』というものを正しく教え彼らもひとりの人間として私達以上に懸命に生きているという事を伝えていくのもこれからの教員に求められていることではないかと思いました。

前述したように今回の介護体験で一番印象に残っているのは「言葉を介さないコミュニケーションの大切さ」と「障がいを持つ人々が懸命に生きる姿」です。表情やしぐさスキンシップから相手の温かい気持ちを感じ取れた。ハンディキャップを持ちながら一生懸命生きていく方々の存在を忘れてはいけなさと強く感じました。

(介護体験等実習生 O・Aさん)

珍しいもの

旭出生産福祉園に残る、木の電柱です。平成25年春までは電線を引き込んで活用されていましたが、その後その仕事を全うして今は、凜と立っている状態です。場所はフリースポートけやきの横のシャガの群生地の中です。



つぎは猿の腰かけです。ゆっくりしつかり成長をしています。傷つけたりしないように触らないで見守りましょう。





ひだまり活動風景



ひだまりでは、現在4名の利用者として活動しています。個々に合った活動の提供、無理はせずその日一日を穏やかに過ごせることを目的として活動しています。

0さんはカラオケが好きで、いつも高得点を出すことに夢中になっています。今までの最高得点は99点、今年の目標は100点を出すことだそうです。

Tさんは散歩が好きで、大きな声で歌を歌いながら気持ちよさそうに活動されています。塗り絵も好きで、鮮やかな色使いできれいに仕上げます。



ひだまりの日中活動として、沖縄出身の看護師の指導の下、入所棟のベランダ側にゴーヤ栽培を始めることにしました。

ゴーヤの種も看護師から分けてもらい準備を始めました。

夏頃には、立派なゴーヤになるよう「大きくなーれ！」と気持ちを込めて皆さんで毎日の水やりをしながら成長を見守っています。

次回の報告をお楽しみに！

ゴーヤ日記



クリスマス会



12月22日(土)にクリスマス会を行いました。会場となった食堂は皆さんで飾りつけを行い看板なども作成し心のこもった素敵なクリスマス会となりました。

職員のアトラクションではハンドベルを披露し、メロディに合わせて全員で合唱しました。

お食事も盛りだくさんで、今年のケーキはツリーの形をしたドーナツで、皆の目を引いていました。

最後はなんとといっても、一番楽しみにしているプレゼントです。サンタクロースが登場すると皆さん自然と笑顔が溢れていました。思い思いのプレゼントを手にした。



季節のイベント

新年会



1月10日(土)に新年会を行いました。今年はおさんが「謹賀新年」と書初めを披露してくれ、気持ちを新たに一年のスタートを切る事ができました。見事な書初めに評判は上々で本人も誇らしげにしています。新年会では、皆さんで今年の抱負を絵馬に書きました。

1月10日(土)に新年会を行いました。今年はおさんが「謹賀新年」と書初めを披露してくれ、気持ちを新たに一年のスタートを切る事ができました。見事な書初めに評判は上々で本人も誇らしげにしています。新年会では、皆さんで今年の抱負を絵馬に書きました。

節分の会



2月3日に節分の会を行いました。今年も病気や怪我をせず、皆さんが元気で過ごせるように年男・年女の方に豆まきをしてもらいました。最後に恵方巻を食べて、会を終了しました。



新年度始めの会!

4月5日(土)に新年度始め会を行いました。午前の部は、ダンス大会! 音楽に合せ皆さんエネルギーッシュに体を動かしました。午後の部では日課、役割、部屋割り・担当など寮内の事の確認を行いました。今年も楽しい一年にしようかと確認しました。



ひな祭りの会

3月3日(月)にひな祭りの会を行いました。ひな壇が飾られると、女性の方のみなさん「かわいー!」と足を止めていました。



